

私

Monthly
Shijyukukai
No.367

塾

www.shijyukukai.jp

界

11

NOVEMBER
2011



新学習指導要領に
対応した新年度戦略



5月に岩手県の被災地に慰問で入ったとき、大船渡市三陸町の吉浜小学校を訪れた。大船渡市三陸町には過去三回、講演、読み聞かせで訪れている。2001年、2002年、2008年の三回で、前二回るときは大船渡市と合併する前で、三陸町という自治体だった。この二回とも訪れた地区は海辺の集落の越喜来で、今度の大地震で津波に吞まれほとんど瓦礫になった。

吉浜小学校を訪れた前日、越喜来地区を見たが、見渡す限り海まで瓦礫の原で、その惨状の凄まじさのため息さえ出なかった。

直木賞作家 志茂田 景樹

カゲキに行こう!

143 瓦礫と先人の知恵が救った集落

二年続けて会場になった三階建ての旧三陸町中央公民館は外郭だけ残っていた。津波は三階まで来たそうだが、内部は暴虐な略奪にあったような荒れ方だった。

宿泊所が吉浜地区の山間にあつたので、そこへ行く途中、同地区の浜のほうへ立ち寄った。

吉浜は養殖アワビで知られる。吉浜産の干しアワビは中国では富裕層に好まれたいへん高価で売られている。

そのアワビの養殖場は、むろん、壊滅していた。浜から続く浅い谷合の地には昭和8年の大津波時、集落があつて多数の死者を出した。

集落は高台の斜面に再興され、旧集落跡は水田になった。今回の大津波で、むろん、水田地帯は吞み込まれた。

しかし、集落は無事で、一人、水田を見に行つた人が犠牲になったが、あとはみな無事だった。水田は塩を抜き、水の入れ替えもすん

で一部で田植えが始まつていた。

集落がここにあつたら多数の犠牲者が出て田植えどころでなかつたらう、と僕は吉浜地区の先人たちの賢明を一人称えた。

2008年に来たときは大船渡市になつていたが、この高台にある吉浜拠点センターで地域の親子を対象に読み聞かせを行ったのである。

翌日、訪れた吉浜小学校は海を五〇〇〜六〇〇メートルほど先に見下ろす斜面にあつて、校舎はファンタジー的な外観を朝日に輝かせていた。

犠牲者が大人一人だけだつた地区の小学校だから、言うまでもなく児童は全員無事である。しかし、他地区の親戚や、友だちが犠牲になり、悲しみに沈んでいる子どももいるかもしれない。

少しそれを意識して悲しい場面のある物語は避けて、二話を語つた。二話目の話

に入つたとき、何人かの子どもが声を上げた。前に僕が来たときに聞いたというのである。

ほかのをやろうかと思つたが、懐かしがつている雰囲気、こういう場合はそのまま続けたほうが喜んでくれるので、そのまま続けた。

「思い出した。そのお話、はつきり思い出したよ」

一人の男の子が目をうるうるさせて言つた。

あれから四カ月経つ。水田では稲穂が垂れているだろう。きつと、今年の収穫は大きな意味がこもつたものになるに違いない。

■ 志茂田 景樹 (しもだかげき) ■
1940年静岡県伊豆生まれ。中央大学法学部卒業後、様々な職に就く。1976年『やっとこ探偵』で第27回小説現代新人賞受賞。1980年『黄色い牙』で第83回直木賞受賞。「サカキバラ症候群の子どもたち」「心療内科」等の心を問う著作のほか、「おれたち不登校、個性と心で生きてやる」、「親と子の価値観戦争」等、現代の教育を問う著作も多い。